

横浜いのちの電話



「運営状況」

社会貢献活動グループでは、講習会、講演会でも年2回を目途にテーマを模索する中、3月実施の「手話入門」の講演会に続き今回は、お話しを伺える機会の少ない「いのちの電話」について、当会 樋高会員のご縁で「横浜いのちの電話」事務局長立花悦治氏に貴重なご講演をいただきました。



参加者は、日頃馴染みの薄い活動のお話しであり、且つ前日まで超大型台風5号の通過が予測された中、日退協から湯藤理事長はじめ19名、非会員7名、計26名が出席、真に悩み苦しんでいる人達から最後の切りどころとして掛かってくる悩み相談の電話を24時間受付体制で受け付け、まずは先方のお話しをお互いの心が通うまでじっくりと聴くことで、共感し受容してあげることが本来の目的で、解決策の回答は自分で出すように仕向け、受け手側の判断は決して差し挟んではいけないという大変重要な役割を、常に研修を重ねながら且つすべての経費をボランティアとして手弁当で活動されている相談員の大変崇高なご活躍ぶりには、心を打たれ、参加者全員が熱心に拝聴、質問も多くあっという間の2時間でした。

「いのちの電話」の発祥は64年前のこと、カソリックのイギリス国教会で14歳で自殺した少女に出会った神父が悩みある人の助けになりたいと、新聞に「死ぬ前に電話を！、電話番号・・・迄」との一行広告を出し、協会の地下室で電話での悩み相談を開始したのが始まりで、新聞広告の反響は、悩める人と、それ以上に、「こうした悩みある人の助けになりたい！」との申し出も多かったとのこと！、日本では1971年に賀川豊彦が関係していた「望みの門」に、ドイツの「ミッドナイトミッション」という組織から派遣されたシスターが、電話での悩みごと相談の受付をスタートしたものが今日の発展につながっているそうです。

最近では自死と精神を病んでいる人からの電話が大変多くなり、特に15才～39才は死因のトップが自死であり、「いのちの電話」としても相談員の増強、対応能力のアップ等により、今後10年間で自殺率を今より30%減少させようとの目標を立てて頑張っているそうです。



現在、「いのちの電話」の相談員は全国で6千5百人位、年間70万件の電話を24時間体制で受けているが相談員の数は足りず、20回、30回掛けてやっと出たとの声もあり、受話器を握ったまま相談する機会も得られず自死した話など、相談員の増強が望まれています。

「いのちの電話」の選考基準は性格柄厳しく、且つ研修費を含めたすべての費用が自分持ちの徹底したボランティア活動ですが、人助けを生き甲斐に挑戦してみたいという方がいらっしゃいましたら、是非応援して頂きたい、とのことでした。

本日のお話しを参考に、私共も身近なことで何か一寸でもお手伝いできるものは実行する勇気を強めたいと感じた次第です。